[別 紙 1]

論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目　HIV disclosure and quality of life among people living with HIV/AIDS in Zambia

(和訳：ザンビアにおける HIV 感染者/AIDS 患者の告知と QOL に関する研究)

指導教員　　若井　晋　教授
東京大学大学院医学系研究科
平成 15 年 4 月 進学
博士後期課程
国際保健学専攻
氏名　岩永 典子

緒言

サハラ以南アフリカは、HIV 流行による最悪の影響を受けている地域であり、ザンビア共和国もその中の国のひとつである。2004 年末現在で成人 HIV 感染率は 16.5%、92 万人の HIV 感染者が存在し、そのうち抗レトロウイルス薬（Antiretrovirals: ARV）による治療を必要とするのは 14.9 万人と推定される。ザンビア政府は HIV/AIDS を国家的問題として認識し、2002 年より ARV の多剤併用療法（Antiretroviral therapy: ART）をコストシェア方式の公的スキームにより公立病院に導入し始めた。ART により HIV 感染症治療は劇的な進歩を遂げたが、ART 成功のためには服薬アドヒアランスが最重要となるので、HIV 感染者の家族に対する告知問題は、特に ART を受けている患者にとって避けられない問題となってきた。本研究の目的は、ザンビアにおいて ART を開始する患者の家族への告知状況を明らかにするとともに、告知に関連する要因を検討し、さらに、告知と生活の質（Quality of life: QOL）との関連についても検討することである。

方法

対象者は、2004 年 3 月から 2005 年 7 月に首都ルサカ市内のザンビア大学教育病院 HIV 外来において、公的スキームによりこれから ART を始める ARV 未経験の HIV 感染者 121 名である。インフォームドコンセントを得た後、研究スタッフである看護師との個別インタビューにより、以下の項目を構造化された質問紙を用いて調査した。1) 家族への告知状況：家族のうち少なくとも 1 人に告知した者を告知者、家族の誰にも告知していない者を未告知者とした。2) 社会経済的属性：年齢、性別、婚姻状況、仕事、月収、教育、家庭での言語。3) HIV 関連属性：HIV 診断されてからの時間、家族内 HIV 感染者の有無、HIV 感染に関する知識、ART に関する知識。4) 心理行動的属性：家族からの支援に対する認識、ART に対する期待、HIV 感染認知前後でのコンドーム使用。5) 健康関連 QOL：Medical Outcomes Study-HIV Health Survey (MOS-HIV) を用いて、11 の下位尺度における QOL スコアを測定した。CD4 陽性 T リンパ球数は、フローサイトメトリーにより測定した。さらに In-depth インタビューを実施した。

結果

対象者 121 名中、解析対象者は 115 名（男性 51 名、女性 64 名）であった。そのうち 93 名（81%）が家族の少なくとも 1 人に HIV 感染を告知していた。このうち既婚者で告知した者（51 名）の 86%が配偶者に告知していた。社会経済的属性および HIV 関連属性は、告知者と未告知者間で統計学的差異はなかった。心理行動的属性のうち、家族からの支援に対する認識について、告知者は未告知者に比べ有意に家族から支援されていると感じていた。配偶者とのコンドーム使用は、感染認知前後で有意に増加していた。ロジスティック回帰分析の結果、告知との関連要因は、家族からの支援に対する認識（オッズ比 5.5、95%信頼区間 1.2-25.6)と、ARV 治療に関する知識(オッズ比 3.3、95%信頼区間 1.1-10.0)であった。告知者と未告知者間で、全下位尺度において QOL スコアに統計学的差異はなかったが、下位尺度のうち役割機能（Role function: RF）において、告知者は未告知者に比べ劣っている傾向がみられた。RF における QOL スコアをさらに層別化分析した結果、告知者のうち、少なくとも高校を卒業した者、HIV 感染および ART についての知識が高い者、および ART に対する期待が高い者において、告知者は未告知者に比べ RF が有意に劣っていた。

考察

家族への告知率 81%は、アフリカで行われた先行研究と比べて、比較的高かった。その理由として、先行研究の対象者のうち ART を受けている患者が 0－30%であったのに対し、本研究では対象者全てがこれから ART を開始する患者であったことが影響したと考えられる。また、既婚者において配偶者への告知率が高かったことは、告知により配偶者からの支援を期待するのに加えて、感染認知前後で配偶者とのコンドーム使用が増加したことに反映されているように、配偶者に対して HIV 感染させることを避けたいとの考えから告知したことが示唆される。

告知との関連要因は、家族からの支援に対する認識と ART に関する知識であった。家族からの支援に対する認識が関連している理由として、告知したことにより家族の HIV 感染者に対する意識や態度が変化し支援的になったため、告知者は家族が支援的だと感じていると考えられた。また、ART に関する知識が関連している理由として、告知者は ARV を服用することの重要性を認識しており、生涯毎日 ARV を服薬するのに家族に隠し続けるのは困難であると認識したからだと考えられた。

告知者と未告知者間で QOL に差異は認められなかった。その理由として、両者の属性の類似性が考えられる。QOL に影響を与える要因として、社会経済的属性（雇用、収入、教育）や HIV 感染症の進行度などが先行研究で明らかになっているが、本研究ではこれらの要因は両者間で差がなかった。よって、告知の有無自体は QOL に反映されなかったものと考えられる。しかし、高学歴の者や HIV 感染および ART に対する高い知識を持った者の間では、告知者の RF が未告知者より劣っていたことは、これらの告知者は HIV 感染により自分の健康が損なわれて仕事/家事/学業に支障が出ていることを理解しており、このような状態で家族に HIV 感染を隠したまま生涯毎日 ARV を服薬することは困難であると認識しているので、告知したと考えられる。

本研究結果より、告知には家族からの支援を受けているという認識が関与していることから、家族内での支援的な環境が向上するように、HIV 感染に関する情報に加えて ART に関する正確な情報を、HIV 感染者のみならずその家族にも浸透させるような教育機会の必要性が示唆された。